

お正月とお餅



星田 理

エッセイスト

暮れが押し迫ってくると、近所の家々から餅つきの音が聞こえてきた。私の家の隣に床屋さんがあったが、その餅つきが近所で一番早かった。ペタンコ、ペタンコと威勢のいい音が聞こえてくると、もう正月がそこまでやってきた気持がした。床屋さんの仕事は年末が忙しい。新年を迎えようとする客で込むからだ。床屋さんで餅をつくとき、おばさんが「ほんの一つですが」といって、餅を持ってきてくれた。「まあ、いつもすみませんね」と、母が礼をいった。だが、「お皿は貸してくださいね」と預かった。その三日後にわが家でも餅をつく。そのときは、わが家の餅をお返しする。それが近所の慣わしでもあった。おばさんが持ってきた餅は、旨かった。がぶりとかむと、甘いあんこが口いっぱい広がった。そのころは、甘いものが少ない時代だったから、あんこの入った餅は、子供にとっては、たまらない味だった。

餅は、正月にはなくてはならないものだ。稲作は東南アジアから伝来したが、そのころ一緒に伝わって来たらしい。餅のことを、台湾ではモア・チといい、中国の江南地方ではモチアイといっている。餅は、丸くて、平べったいのは同じのようだが、もち米の耕作も四季に富んだ日本の風土には適していた。われわれの先人たちは太陽や月を崇め、正月には米や餅を神に供えて、その年の豊作を祈願してきたといわれる。

平安時代に一人の貴族がいた。御堂関白と呼ばれた藤原道長である。今でいうなら大臣であるが、順風満帆の人生を送った人といわれる。その道長がある日、宮中の宴の席で、ぽっかりと空に浮かんだ月を見ながら、「この世をばわが世とぞ思う望月（もちづき）の欠けたることもなしと思えば」と詠んだという。その歌は、城下の人々に広がり、庶民たちは道長のような幸せな人生を送りたいものだと考え、望月（もちづき）の望（もち）から、餅（もち）と呼ぶようになったといわれている。それまでは、毛知比（もちひ）といっていたようだ。

浜浅葉日記という古い農民日記がある。天保5年（1834）から明治35年（1902）までの69年の間、親子三代にわたって書き継がれた農民の記録である。この日記には、餅は、神仏への供え物と、集落の行事や祝い事に使われてきたことが記されて

いる。

浜浅葉日記に記されている中で興味深いことは、祭事のたびに、農民が神に餅を供えたことである。餅は、祝い事の品にも使われたが、供えられた餅は、祭事が終わると人々が一緒になって食べた。これを直来（なおらい）といったが、その餅を食べることによって、新たな力が与えられると信じられていた。

もう一つ大切なことがある。餅が家と家、人と人の中で贈答の品として使われたことである。餅は神への信仰的な行事を中心に使われてきたが、平安、室町時代、さらに江戸時代へと移っていく中で、餅が庶民的な食べものになってきたのである。餅が庶民の食生活の中に広がり、地域社会の中で餅のやり取りによって、人間関係を作ってきたことだ。餅のやり取りで、他家の餅を味わうことができた。餅をもらって包みを開け、手にとって、餅のやわらかさに触れ、そして食べて味わう、という人間の五感を通じて隣人とのかかわりを深め、人びとの心の温かさに触れてきたことである。

大晦日には、どこの家でも神棚をきれいにし、鏡餅を供えて新年を迎える。私の田舎では鏡餅のことを「おかがみ」といった。つきたての餅はやわらかいし、それを丸くして形よく作るのが大変だった。固まった鏡餅の上に、形の良いみかんを上げ神棚に供えた。大きな鏡餅を作って床の間にも飾った。餅の白さと、みかんの鮮やかな色は、正月の象徴的な美しさがあった。鏡餅は日本に伝わってきた文化の一つだと思っている。

民間にいたころ、社屋に神棚があって大きな鏡餅を供えた。正月が明けると、柔道をやっていたOBが来た。彼は毎年、鏡餅をもらいにくる。こんなでっかい餅をどうするのか、と聞いてみた。すると、道場の鏡開きに、しるこを作って子供たちに食べさせるという。彼は長年、柔道をやってきた人で、指導にも当たってきた。私は、ふと思った。彼には長年の経験から、餅を食べると力がつく、その直来（なおらい）の意味を知っている人だと思った。子供たちに鏡餅を食べさせ、そして元気をもたらそう、そう願っていたのだろう。

床屋さんのおばさんが持ってきてくれた餅の記

憶は、今も頭の片隅に残っている。餅をもらったり、お返しをしたり、懐かしい思い出である。浜浅葉日記に記された餅のことと重ね合わせると、子供のころ田舎でおこなっていた母たちの餅のやり取りは、ささいなことではあったが、大切な意味を持っていた気がする。あれは太平洋戦後の半世紀も前のことだが、毎日の食べ物も十分でなかった時代であった。だが隣人との人間関係が豊かであったことは間違いがない。今の時代にも贈答品のやり取りはある。だが近年は、配達の人が「宅急便です」といって届けてくれるだけで、送った人の顔が見えないのである。時代が変わった、といえば、それまでのことだが、今の時代には、小さな文化さえも失われてしまった気持ちがしてならない。「お晩でした、ほんの一つですが」といって、餅を持ってきた床屋のお婆さんと母の間には、短い会話があった。それは平凡な話しであったかも知れない。だがそんな世間話の付き合い方が、時代を生きる隣人としての知恵だったのだろう。

最近パソコンで仕事をしている。機器を操作して仕事ができる便利な時代である。だが相手と顔を合わせて話をするという機会が少なくなったように思う。Eメール、ブログ、そしてチャット、それで仕事が足りるからである。近頃は利便性が先行して、仕事が効率的に進められ、職場の仕事は無駄なく進められている。確かに便利な世の中になったが、その中で失われていったものが多すぎる気がする。近頃は、運動不足や、肩こり、眼の疲れが多くなったと聞く。先日、近所の指圧に行ったら、最近若い人が来るんですよと、先生がいていた。気になる言葉だ。

正月には美味しいおせち料理を食べ、お雑煮を食べるのもいい。だが料理にあきたら、鏡餅の入った甘いしるこを食べるのがいい。鏡餅には、直来という日本古来の文化がながれているからだ。鏡餅を食べることによって、力が与えられ、今年の心願が成就されるかも知れない。

profile

星田理 ほしだ おさむ

1937年京極町生まれ。'61年北海学園大学卒。北海道開発局退職後は、民間勤務。現在は業界月刊誌にエッセイ連載中。囲碁四段。家族：妻、中国新疆ウイグル自治区出身の青年。
